屋久島・種子島

岩波写真文庫　278

屋久島・種子島
278

岩波写真文庫　278　屋久島・種子島

編集　岩波書店編集部
写真　雨宮淳三　加藤数功　川越政則　白沢文一
　　　鹿児島県観光課　熊本営林局
　　　岩波映画製作所

民家の庭先にはバナナが実る．屋久島

九州の南端、鹿児島県大隅半島の佐多岬から四十粁の海上に低平な丘陵性の種子島が臥牛の如く浮び、同じく七十粁には高峻な山岳から成る屋久島が屹立している。地形の全く異るこれら二つの島には榕樹が繁り、ソテツが花咲き、バナナが実る。昔から大陸や南からの海洋性文化が本土へ流入する入口に当っていた。新井白石の「西洋紀聞」「采覧異言」が、屋久島に渡来した一宣教師からの聞き書に拠ること、鉄砲や甘藷が初めて種子島に伝わったことなどは、これらの島々の歴史的な特異性と重要性を物語るものであろう。しかし古書に「京を去ること五千余里」と記されたほど辺境の孤島であり、今も島民の生活や風習の上に離れ島的な性格が強く残っている。最近は両島に飛行場が設置されたり、南九州総合開発の一部に加えられたりして、久しく置き忘れられたようにひっそりとしていた南海の島にも新しい朝が訪れようとしている。

種子島の西之表町は印刷過程中に、市制が施行されました。

目　次

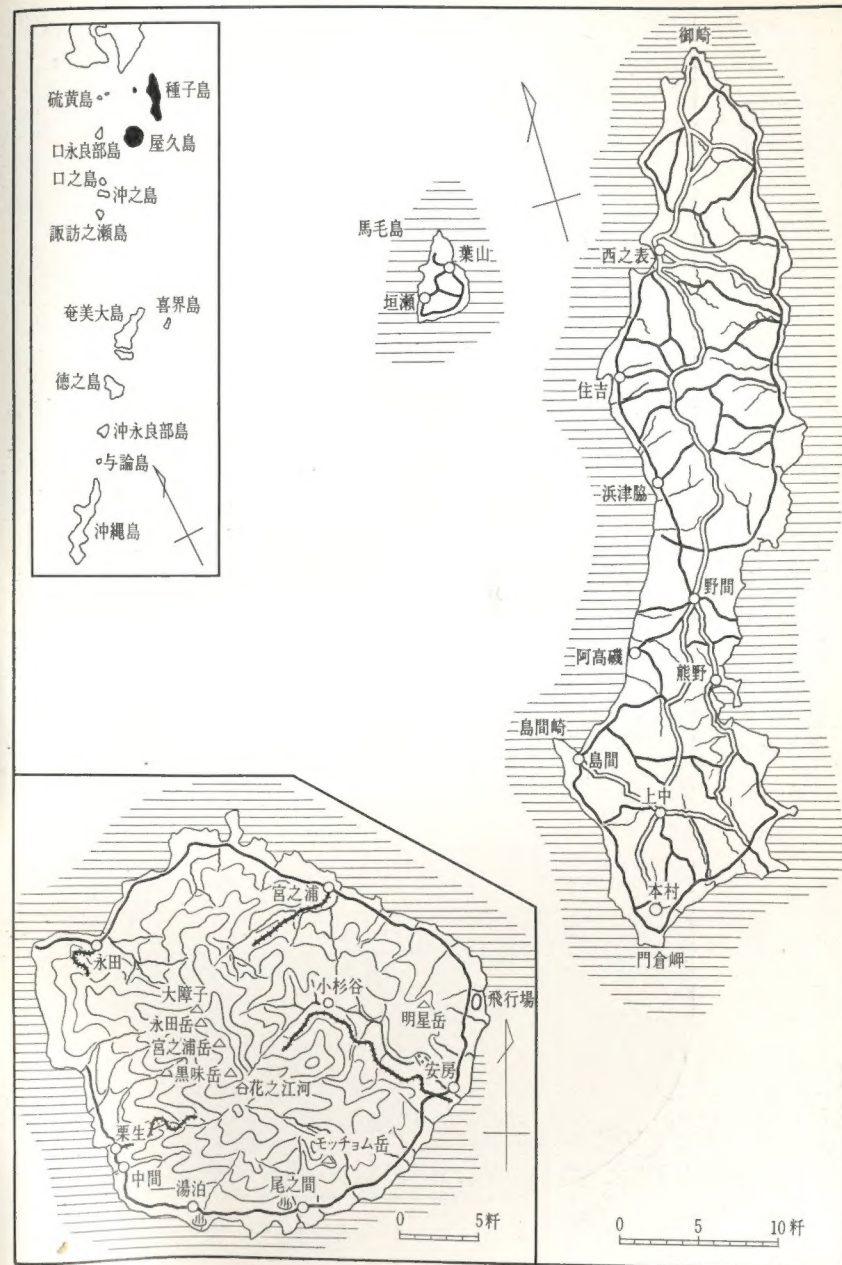
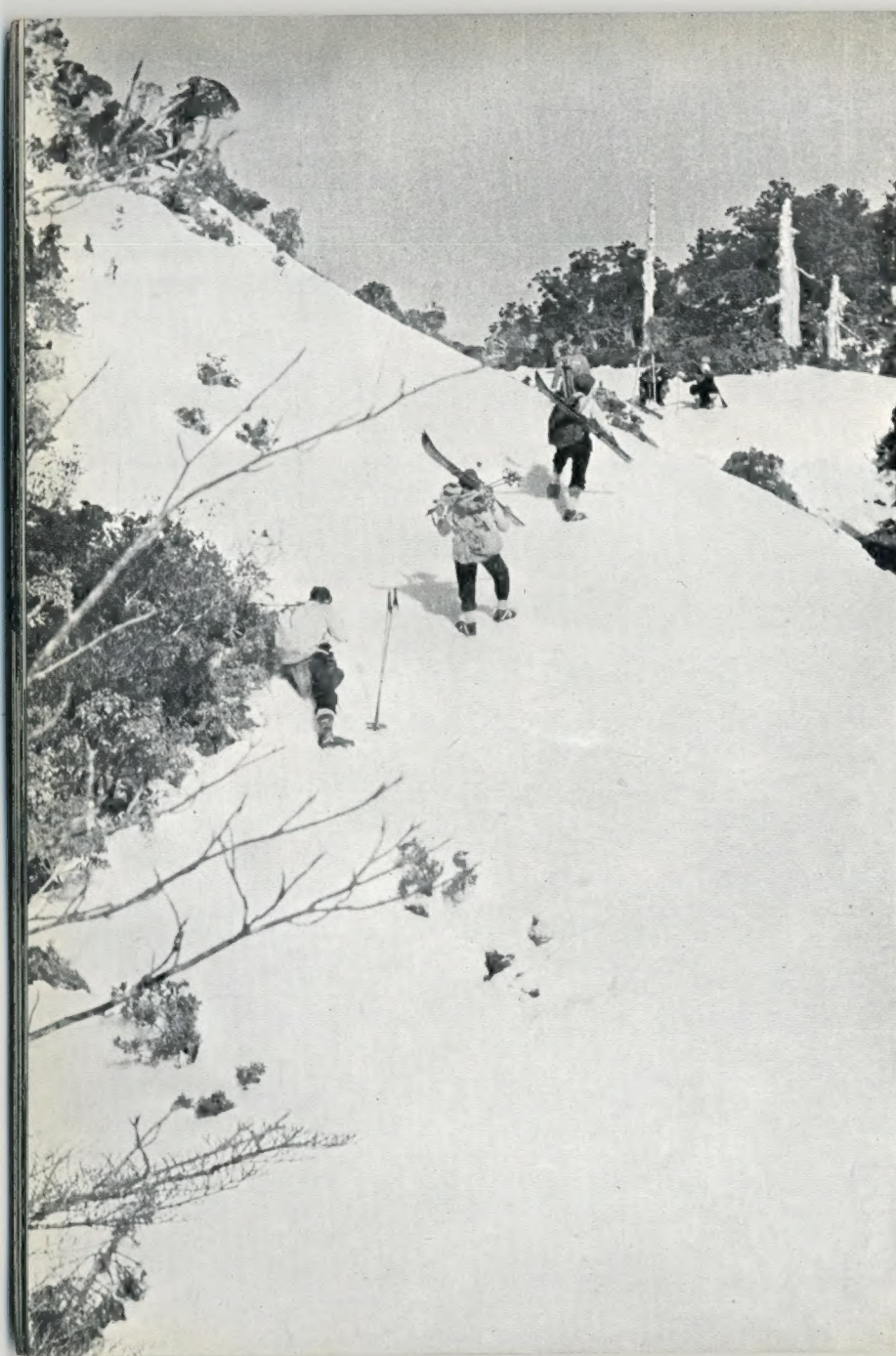
定価100円　1958年10月25日発行 ©　発行者　岩波雄二郎　印刷者　米屋勇　印刷所　東京都港区芝浦2ノ1
半七写真印刷工業株式会社　製本所　永井製本所　発行所　東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3　株式会社岩波書店

硫黄島
種子島
口永良部島
屋久島
口之島
沖之島
諏訪之瀬島
奄美大島
喜界島
徳之島
沖永良部島
与論島
沖縄島

馬毛島
葉山
垣瀬

御崎
西之表
住吉
浜津脇
野間
阿高磯
熊野
島間崎
島間
上中
本村
門倉岬
0　5　10粁

宮之浦
永田
大障子
小杉谷
飛行場
明星岳
永田岳
宮之浦岳
黒味岳
安房
石花之江河
栗生
モッチョム岳
中間
湯泊
尾之間
0　5粁

屋久島の主峰群．遠景は口永良部島

日本書紀に、推古二十四年(六一六)、掖玖人三口帰化す、天武五年(六七七)には多禰人を飛鳥寺で饗すという記載がある。舒明元年(六二九)、掖玖は屋久島、多禰は種子島である。掖玖に田部連、天武八年(六八〇)、多禰に倭馬飼造が大和朝廷の使節として遣わされたが、多禰では稲も作られていたらしく「稲つねに豊かなり、一たび植えて再び収む」と報告されている。大宝二年(七〇二)ごろ、これらの島に郡制が施かれ、数年ならずして多禰に国府が置かれた。掖玖はそれ以後、多禰の属国となった。屋久島は面積五百四十平方粁、人口約二万四千。九州第一の高山、宮之浦岳(一九三五米)を主峰とする円形の山塊で、おもに花崗岩から成るが、種子島はこれと対照的に、長さ五十八粁、幅五粁—十五粁の細長い台地状の島で砂岩、粘板岩、礫岩からできている。最高点も三百米を出ない。人口は六万六千。このあたりの海水温度は年中二十度を下ることなく気候は亜熱帯性であるが、高峻な屋久島では垂直的に気候や植物が変化し、冬は群峰の頂上に雪が積り霧氷も見られる。年間平均三千七百粍、山腹では八千粍に及ぶという雨量は有名な屋久杉の原始林を養ってきた。

中ノ小屋から更に8粁、黒味岳南の鞍部

中ノ小屋付近．トロの終点から約1粁

九州地方で冬山といえば宮之浦岳を目指す人が多い．亜熱帯の雪の山，九州一の高峰という点に特殊の魅力があるのだろう．

登山路は各部落からついている．宮之浦岳，永田岳，黒味岳など島を形成する群峰を八重岳と総称．住民は宮之浦岳を奥岳とよんでいる．麓から亜熱帯，温帯，寒帯と変化して行く植物相が珍らしい．

針葉樹と濶葉樹の混合林．7合目付近

花之江河の小屋を出発

島外からの登山者は普通，東海岸の安房（あんぼう）から汽動トロを利用，その終点からが登山路である．12月—3月は標高600米付近から雪がある．一晩に1米も積りスキーも可能だが，直ぐにまた消えたりする．

岩についた霧氷

屋久島は、大隅半島の肝属山地が次第に高度を高めながら一旦海中に没し、再び高峰を以て現われた非火山性の島。山麓の沿岸は海蝕による台地が主である。俗に八百八河といわれるほど多くの川が中央稜線から放射状に流下しているが、何れも急流で、発電に適している。集落は島の周囲をめぐる県道に沿って、これらの川の河口部に点在し、奥岳参りの山道が開かれている。豪壮なアルプス的岩峰の渓谷を流れる花崗岩床の渓流はあくまで清澄で連日の豪雨にも濁ることはない。標高六百米から千五百米の間にある屋久杉の巨樹林を抜けると、山頂近くはミヤママンネンスギ、ヤクザサ、ヤクシマスミレ、ヤクシマウスユキソウなどが生い茂り、山頂部には見事な長石の結晶をつけた、累々とした大花崗岩の露出がみられる。冬山は湿潤な積雪を踏みながらの登山なので、寒冷のために雪が硬くなった千六百米以上のクラスト地帯に入るまでが苦労だ。

永田岳の頂上をみる

宮之浦岳の山頂．この山は九州の最高峰

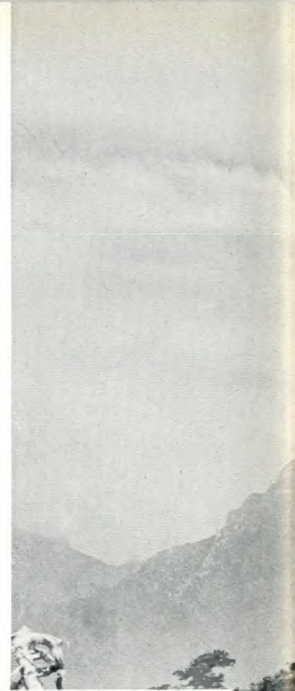
黒味岳頂上．山頂に立てば全島が見わたせる

黒味岳から北方，宮之浦岳方面をみる

永田岳頂上付近の岩壁

永田岳は標高千八百九十米。屋久島西北岸の永田部落に注ぐ永田川の源流点だ。頂上から北方の大障子岳尾根につづく岩壁ではロック・クライミングも楽しめる。永田岳から主峰の宮之浦頂上まで約四粁。北に九州本土の開聞岳、佐多岬、眼下の海上に種子島、黒島、口永良部島の薩南諸島が一望される。屋久島の山は頂上付近までどこでも水があり、悪天候の時でも黒味岳、投石、化粧岩などの岩屋があるし、花之江河には営林署の二十名収容の小屋もある。四月から各部落の島民がそれぞれの登山路から奥岳参りをする。

永田岳から西北に口永良部島を望む

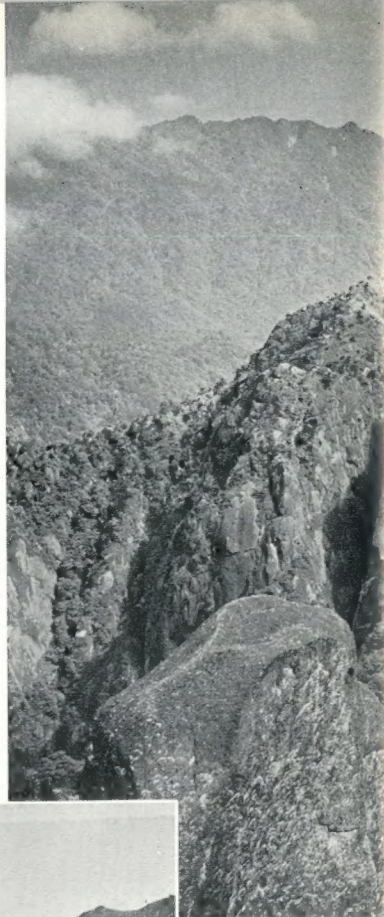
永田岳から南，黒味岳(左端)方面をみる

花崗岩の巨石におおわれた永田岳の頂上

永田岳から北方，大障子岳へつづく陵線をみる

萎縮した屋久杉の巨木

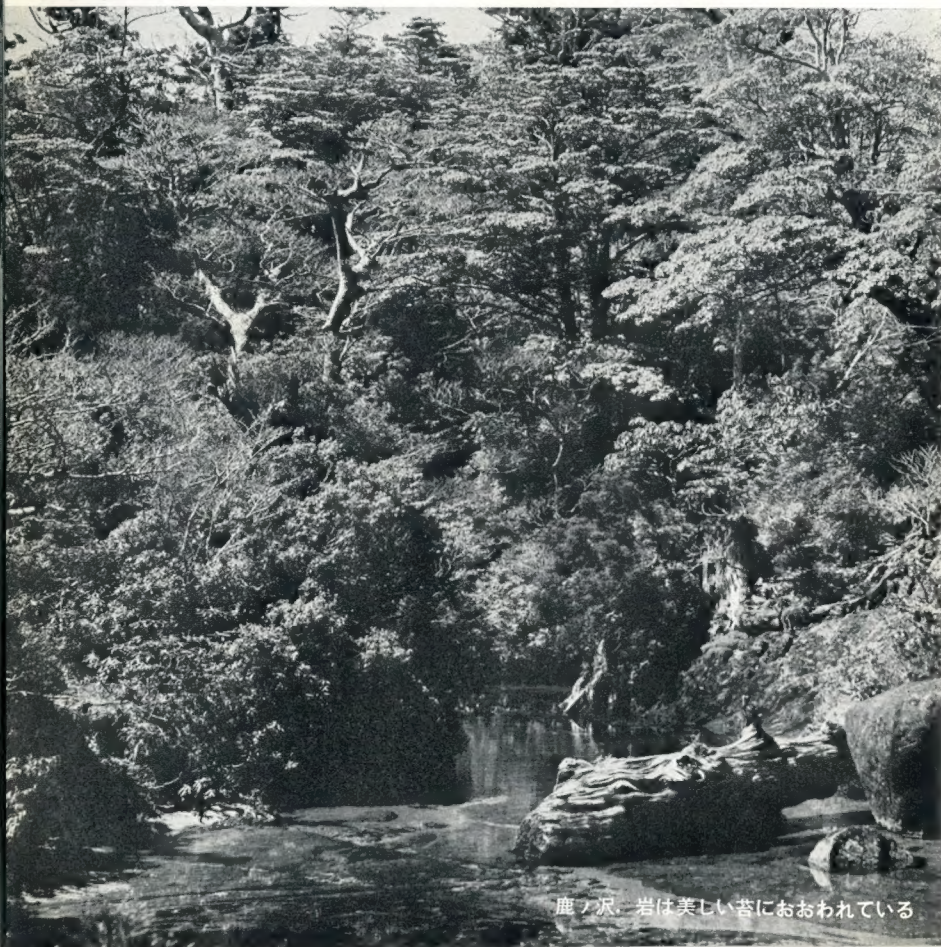
住民の奥岳参りは昔からの風習だったらしく、この地方の人々は「タケメイ(岳参り)」といっている。往復に二泊三日かかるが、帰りにはシャクナゲの花を土産にし、山の霊花として墓や床に供え、村民にも分配する。季節風や低気圧が、黒潮の中に聳える山岳島にふきつけて上昇し、更に南方海上に発生した台風が集ってくる。山が鳴り海が荒れる。僅かな畑作に頼っている島の人々が、山の神を怖れて心から祈らずにおられないのは当然であろう。しかし、この気候は千古の森林を育てるには好都合であった。中腹に繁茂する屋久杉の原始林はいま天然記念物に指定

立枯の屋久杉

屋久杉の原始林

永田岳からみた宮之浦岳主峰

されているが、杉の自然林はこの島が南限である。所々に立枯れた杉の大木を見るが、氷雪と強風に堪えて幾千年か、その姿は崇高でさえある。

永田岳8合目，化粧岩屋

標高千五百米から千七百米の緩傾斜地には花之江河のような細流を伴う高層湿原が発達し、ヤクスギ、ヤクタネゴヨウ、ツクシハイネズ、ヤクシマシャクナゲ、ハイビャクシンなどが群生している。屋久島は気象条件が複雑で、年間を通じて強風が吹き、垂直的に気温に変化があり、雲霧が多くて日照時間が少ない。このような特殊性が植物にも特異な相をつくらせている。

鹿ノ沢，岩は美しい苔におおわれている

原始林の中の高層湿原，花之江河

屋久島は、俗に人口二万、猿二万、鹿二万といわれるほどで、全島が殆んど森林におおわれている。海岸地帯のガジュマル、アコウ、ヘゴなどの亜熱帯樹林から高度が高くなるにつれて針葉樹林、灌木林と明確に層を分っているが、林間には蔓性植物、羊歯、蘚苔類が繁り、それを縫う流れはガラスのように透明で美しい。登山者を迎える自然景観は絶えず変化して行く。

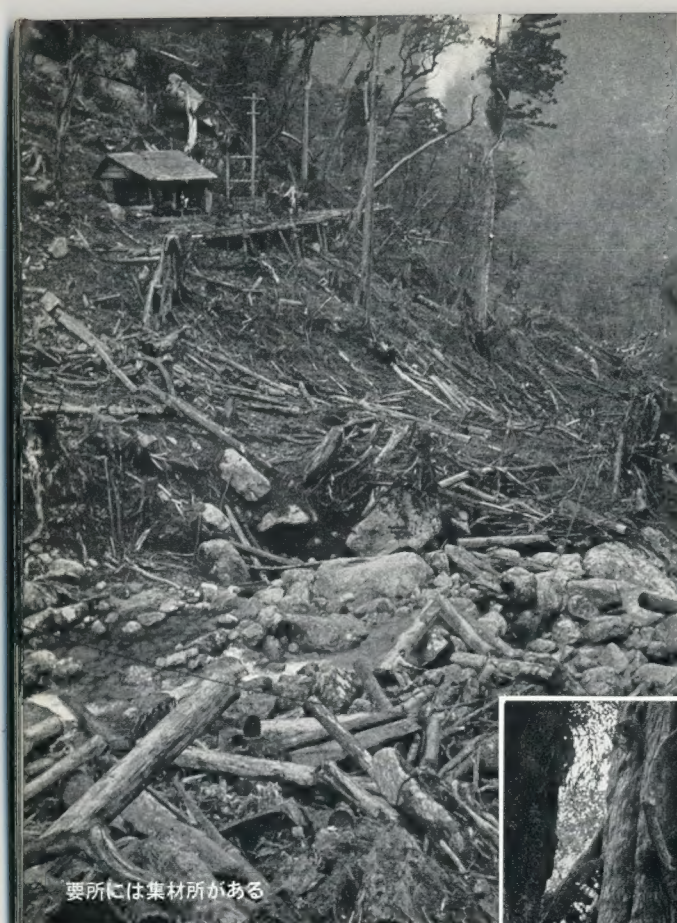
花之江河は安房から27粁

ウイルソン株の空洞．内部から見上げる

屋久杉の成長曲線をみると或るものは五百年から六百年になって極大を現わし、その後でも極大点を示すものがある。千年、二千年にわたっても成長をやめないこの生命力は確かに一つの驚異である。しかしその成長速度は極めて緩慢であるから木理は緻密で美しく、質は堅くて油が多く腐りにくい。屋久島では樹令千年以上のものが屋久杉、千年以下のものが小杉とよばれている。伐採された切株のうち、標高千百米付近にある最大のウイルソン株は、根ぎわの回り約十八米、地上四米から五米の高さの切り口は周囲十三米に達する。

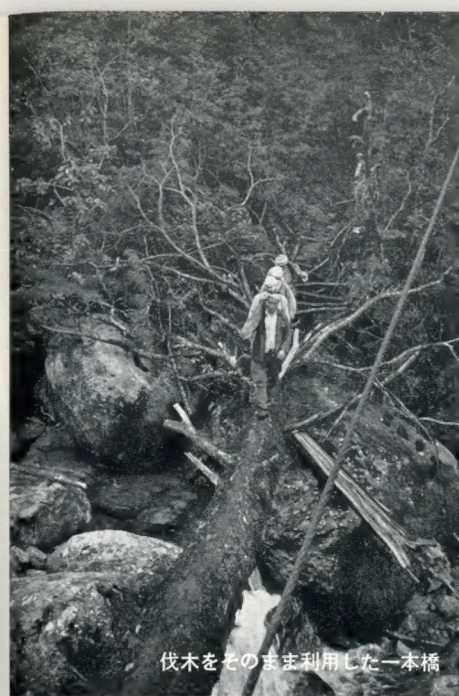
屋久杉の切り口

切倒した杉はその場で適当に切る

ウイルソン株の空洞入口．中には木魂神社を祀る

三国名勝図会にも、屋久杉は「質堅密にして油多く文理麗し、数百年を経て、腐ることなく虫つくことなし」と書かれている。屋久杉は、昔から貴重品あつかいにされていた。大木は丸木舟に利用されたが、島津藩直領時代には、手斧で割った平木(板瓦)が貢租の代りに直納されていたという。製材された板は、その腐りにくい性質が迎えられて、屋久杉の板屋造りといえば、贅沢な高級家屋と考えられていた時期もあった。

要所には集材所がある

伐木の積込み

足場を組み，根本から１米位のところで伐る

伐木をそのまま利用した一本橋

古木に着いた着生植物

屋久島の森林を国有林にするか、民有林にするかという問題は明治三十年代から起り、三十年も争われたのち、大正九年(一九二〇)に国有林と決定した。全面積の八割以上、およそ三万町歩が国有林に編入され、上屋久と下屋久の両営林署でこれを二分している。営林署の普通区域内の屋久杉蓄積量は倒木を合わせて約八十三万石、谷渡り用の丸太を担いで奥地へ入る伐採夫たちによって年間八万石ずつが伐採されている。

山深く分け入る樵夫たち

[illegible]の[illegible]トロで[illegible]てくる[illegible]ある

小杉谷(こすぎだに)は密林中の異国ともいえるような所だ．おもに伐採関係者とその家族とが住み，伐採事務所，役場支所，分教場，公衆浴場，営林署宿泊所，公民館などがあって屋久島ではちょっとした山間都市の観がある．営林署は王者的存在で，道路といい橋といい，島で新しいものは殆んど役所が造ったものだ．登山者も安房の営林署を訪ねて軌道の便乗や宿泊所の依頼をしなければならない．

[illegible]半年[illegible]

原木はトロで山を下る

小杉谷の伐採所

屋久島の最長流，安房川は30粁の流程に2千米の落差をつけて太平洋に流れこんでいる．汽動トロは安房を起点として安房川の右岸を登りながら，クワズイモ，ヘゴ，シダ類の茂る亜熱帯景観を眺めて過ぎる．10粁も登ったあたりから上は屋久杉，ヤマグルマ，モミの巨大な密林である．ここには昔から全国の腕ききの木こりたちが集ってきていたので，古い木やり唄も残っている．

安房川の谷に[illegible]

安房川河口から[illegible]を望む

山と山との間に発達した大きな谷は海辺まで迫っているが，谷沿いに流下する安房川，宮之浦川，永田川，栗生(くりお)川など島の河川は何れも短流である．安房川河口の安房港も，一度び背後をふりかえれば，そこはもう深い谷だ．中流の原始林の中には千尋(せんぴろ)ノ滝のような景勝も見られる．

安房川と[illegible]の町並

安房川の中流，密林の中の千尋ノ滝

台風に備えて屋根は低く建ってある

電柱を立てるにも骨のおれる石ころ道

安房からの運動トロの出発

宮之浦，永田，栗生にも森林軌道はあるが安房を起点とするものが最も長くて全長22粁．営林署の許可さえあれば登山者の利用にも供される．安房は下屋久村の中心で人口約2千．中学，高校，官庁支所などのある小ざっぱりとまとまった部落だ．

弁当が一番[illegible]

運動会は島の最大の行事の一つ

安房の下屋久営林署

一家総出の昼食

貧しい中の貧しい人たちは台風の潮害をうけない山中の新しい土地を求めて行く。これが開拓地だ。未開地に小屋を建て、疎林を伐り、それを焼き、甘藷を植え、僅かな野菜を作る。以前はトビ魚の漁撈に依存する人が多かったが、それも次第に減少した。生活を建て直すための水稲早期栽培、ポンカン増植、茶園、椎茸栽培、緬羊導入は未だに見通しがつかない。沖に漁場はあっても資本力のある県外船を眺めているだけだ。

開拓地の老婆、後に竹の水道がみえる

疎林を伐採して焼畑にする

安房付近の墓地の霊小屋の板壁には死者が生前好んだ民謡を書いたり、盃の絵を描いたりしてある。かみしもをつけた神社の踊りなどと共に今に残る特殊の民俗であろう。耕地は殆んどなく、狭小な台地の上に自給用の野菜を作る。台風に備えた低い屋根の民家や急峻な山を利用して高所から竹筒で水をひいた独特の水道などは全島共通だ。海沿いの南国風景は明かるく山は麗わしいが、人々の貧しさはおおうべくもない。

円周九十四粁の島の海岸道路にはバスが走り一部落ごとに客や荷物を拾って行く。海上は鹿児島、種子島、屋久島を結ぶものと、鹿児島、安房、栗生を結ぶ二航路があるが、着岸できる港は一つもない。百余の橋があるといわれるほど川は多いが、永田川、宮之浦川の河口部に狭い沖積地があるだけで、大部分は海蝕台地である。永田部落では早くから水田が開かれていたが、その他のものは殆んど明治以後の新田である。特産物といえば、どこでも南島共通の甘藷と黒糖と干魚。北岸の志戸子付近に産する硯石は特殊のものだ。宮之浦には延喜式神名帳に記載された益救神社がある。南海の島では唯一の式内社である。宮之浦は上屋久村の中心。定期船が停泊するが客や荷物は沖まで小舟で運ばなければならない。

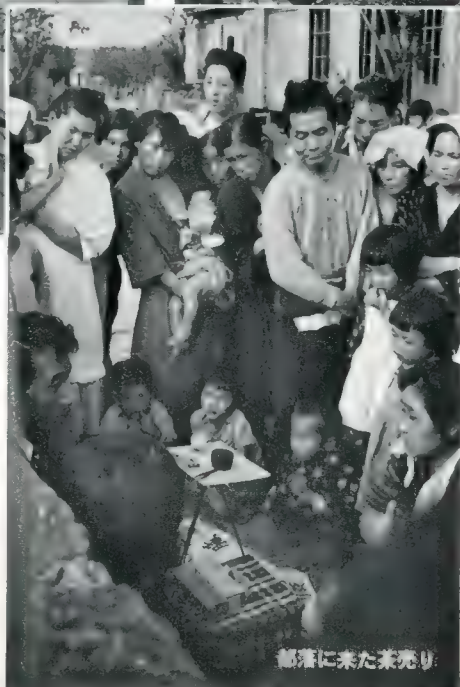
志戸子部落のあたり

宮之浦川河口の船溜り。本船からのハシケもここに入る

永田海岸の貯木場

木材は筏に組んで本船へ運ぶ

部落に来た米売り

台風に備えて石をのせた板葺の家が多い

永田部落でも、伐り出された木材は筏に組んで本船まで曳いて行く。わずかな民有林が多少の収入にはなるが、主体はやはり農業だ。板葺の平木は、長さ四十五糎、厚さ三粍くらい。屋根は三寸勾配の緩傾斜。平木の上を丸い花崗岩で押えるが釘は使わない。土地の人は、台風に強く十年以上の使用に堪えるといっている。

畑へ行く人

中間部落の海岸．民家は海岸段丘の林の中にある

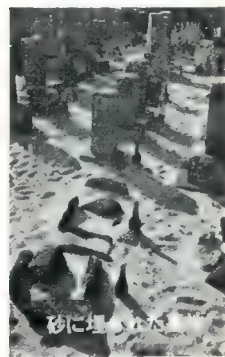
ガジュマル．気根の下も道になっている

栗生や中間は島の裏側といった感じが強い．住民の生活や服装も北海岸の部落とは幾らかずつ違っている．甘蔗やガジュマルよりも「浜は白砂，青い波」を自慢の一つにしているのは，この島の人々が海の彼方に遥かな思いを馳せるからだろうか．

墓地には花の代りに千年木を植える

砂に埋もれた墓

中間の川のほとりに繁るガジュマル

屋久島から南薩摩にかけての砂浜海岸には五月下旬から八月上旬まで、長さ一米ほどのウミガメが深夜ひそかに産卵にくる。卵の形は丸く、殻には石灰分が少ないのでやわらかい。

食用になるが、栄養価は鶏卵の数倍もあるといわれる。一回に二百五十個ぐらい産むが、栗生海岸の子供や若者たちは、産卵を待ちかまえるようにしてそれを採取する。砂でまぶし、口にあてて握りしめるだけで黄味が飛び出る。時価は一個五円。カメは産み終ると砂をかぶせ、胴でたたき、溜息をついて海に帰って行く。

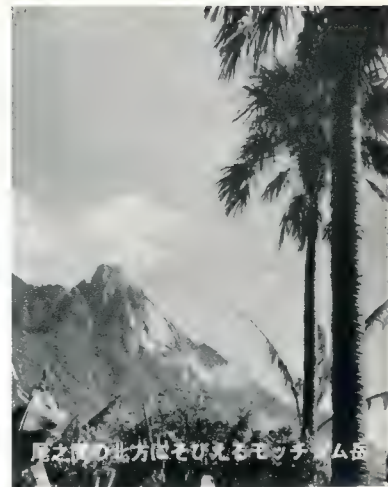
[illegible]．海岸の岩の間にある湯泊温泉

[illegible]の脱衣場．尾之間温泉

海岸段丘上の中間部落から東へ道をたどると湯泊温泉がある。露天の浴槽は男用と女用とあるが、潮が満ちれば波の下になる。泉温は摂氏四十度。以前は石鹸の代りに灰汁を使っていた。ここから海沿いに、平内部落を過ぎて更に東へ行ったところにもう一つ尾之間温泉がある。温度は五、六十度。硫黄臭の単純泉である。北部と南部とでは都市文化流入の程度も違い、南岸の住民は殆んど裸足で、服装は袖なし、着物の人が多い。

[illegible]．尾之間温泉

尾之間温泉は部落の管理

尾之間の北方にそびえるモッチョム岳

部落共有の洗い場では野菜も衣服も馬も一緒だ。南岸では馬が多く、馬車が部落間の交通運輸機関。これかかったような草葺の民家も目につく。部落は石垣を足場に、まわりに広葉樹の林をめぐらし、その林の中に耕地があり、甘蔗や里芋が作られている。里芋はタロイモともよばれているが、明治の初めころまではこれが屋久島住民の主食であった。島では甘藷よりもタロイモの移入の方が早かった。稲は台風のために穂が吹きちぎれてしまうので、住民の食生活に対する関心ははじめから風に強い根生の芋類に向けられていた。

尾之間の洗い場．馬も食器も同じ川で洗う

モッチョム岳山麓の砂糖しぼり小屋

温暖な貧しい島では、どこでも原始的な砂糖つくりが行われているが屋久島もその例に洩れない。牛馬の畜力による砂糖しぼりが、水車仕掛けで甘蔗の茎をしぼるようになっても原始的な点では五十歩百歩であろう。しかし煮つめただけの黒糖が現金に代ると思えば住民にとっては決してゆるがせにできない生活手段である。

家族総出の黒糖生産が、よくこの間の事情を物語っている。だが収益は辛うじて生存を保つ程度でしかない。

材木の積込み。安房

安房・河口の築港工事

鹿児島市の港から安房まで直行船で八時間。沖停泊の不便を解消するために最近、築港工事が始められた。統計によれば、下屋久村の農業生産は甘藷、黒糖、水稲、陸稲、麦

沖の定期船まで小舟で乗りつける。出湯

など総額一億円になるというが、一万人の人口割にすると年間一人当りの粗収入は約一万円にしかならない。だから島民は凡て潜在失業者だとも言えそうだ。暖地でありながら、台風や耕地面積の関係から野菜も果物も不足し、島民の健康さえ憂慮されている。しかし住民は、いま三十万キロワットの発電や化学工場建設の計画に望みをかけている。

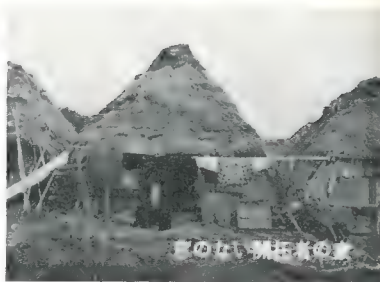
台風で崩れた堤防

[illegible]魚の漁期以外には人[illegible]ない

[illegible]の土[illegible]を開[illegible]して甘[illegible]を作る

馬毛島（まげ）は、屋久島の東北方約四十粁、種子島の西之表（にしのおもて）港から西方十二粁の海上に伏せ皿のように浮んでいる周囲十二粁、平均標高二十米の低平な島。大波のときは波に隠れて種子島からも見えない。葉山海岸に南洋の原住民部落そっくりな小屋が並んでいる。ここは種子島の漁師たちの飛魚漁の基地である。島内にはソテツがしげり、その間に小さな道が通じている。江戸時代には飢饉時のソテツの実の採取場で、種子島領主の禁猟地であった。明治、大正の頃は緬羊の牧場だったこともある。終戦後無人島同様になっていたが、昭和二十六年、はじめて四十戸の入植者がきて荒地を開墾した。昭和三十二年現在で人口約四百六十人、一戸当り一町九反歩の耕地を耕やしている。沿岸ではエビ、ナガラメ、海草がとれるが開拓者は漁業権を持たない。

鍋をつくろうよ

窓のない開拓者の家

ここの開拓部落は馬毛島、八重石の二つの開拓農協から成っている。稲、甘藷のほかに落花生、菜種、蔬菜も作り、採草地や薪炭林もある。開拓者の中には生活扶助をうけているものもあるが、年間平均収入は屋久島に比べると遥かに高い。統計では二十万円から三十万円が十三戸、十五万円から二十万円が四十五戸、十万円未満が四十二戸である。

台風に備えて柱の根元は石で支えてある

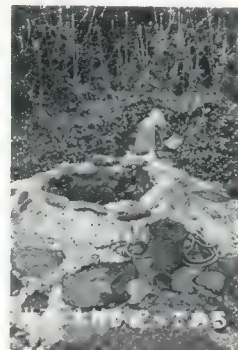
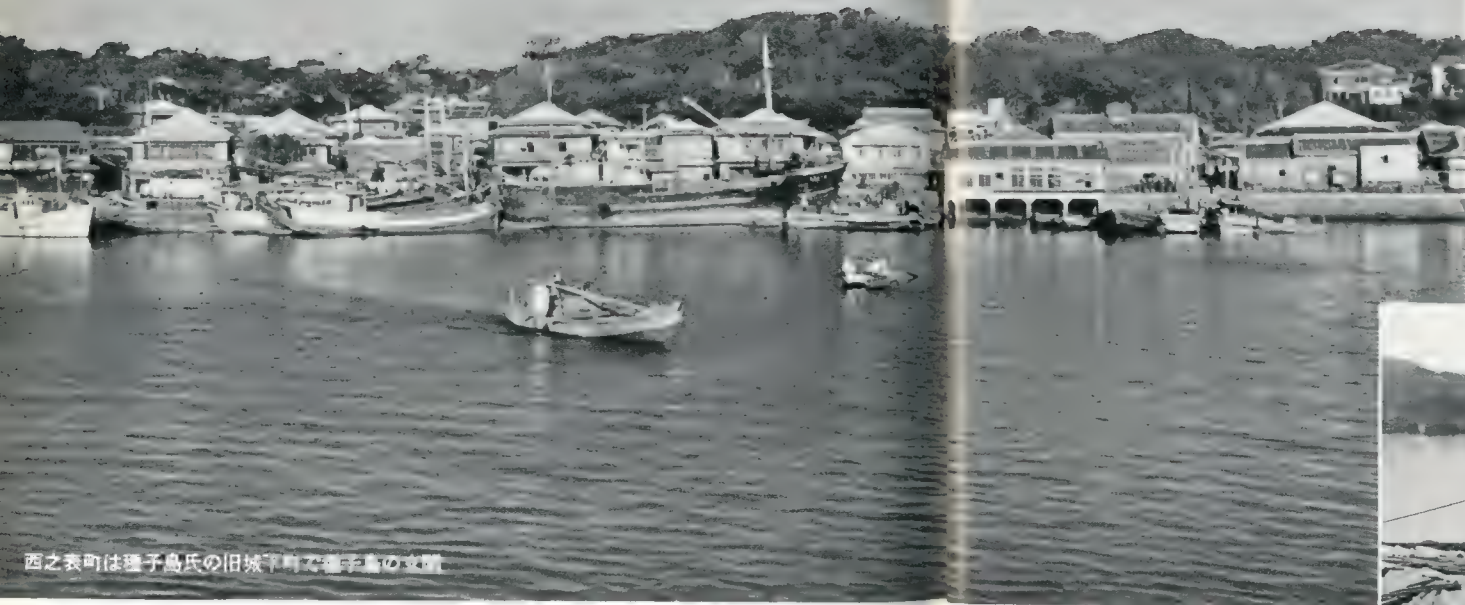
馬毛島分教場には裸足の生徒が多い

馬毛島の分教場は昔の羊小屋を利用していたが、最近、入植施設補助で新しい建物ができた。開拓者的な新興の意気は学童たちの心にも伝わっている。住居は低く粗末な萱葺だが、耕地面積は百九十町歩余、甘藷の四十万貫が最大の現金収入だ。水田は僅か一町歩しかないが、陸稲の作付面積は甘藷に次いで五十七町歩、その品質は既に定評がある。

松林を開墾する生徒たち

分教場、生徒は約90名

馬毛島の漁期は５月と６月，そのころは産卵のために早暁接岸する飛魚で海水は牛乳のように白くなる．漁師は午前２時ごろ冷飯をかきこんで一斉に出漁するが，その光景は，まるで絵に見る壇ノ浦の源平合戦そっくりだ．漁獲高は年間約６千万円．

漁家の露天風呂

中種子町松原山の飛行場

西之表町は種子島氏の旧城下町で種子島の玄関

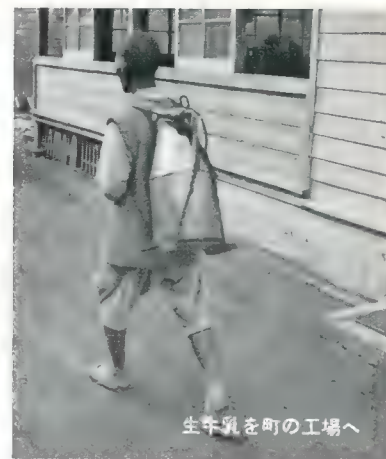
種子島へくると、屋久島とはよほど事情が変ってくる。西岸北寄りの西之表町の港付近は種子島氏の城下町として発生した。ここは屋久島を含めた熊毛郡の首都である。町を流れる甲女川の河口が浅く、船が停泊するのに大きな不便を感じていたが昭和三十年、定期船二隻が同時に着岸できる岸壁が完成した。強風のときの船舶の避難港、木炭、黒糖、澱粉、パルプ材の積出港として大きな役割を果している。移入されるものの中では、年間五千万円に及ぶ蔬菜や日用雑貨品が目につく。中央高台にできた鉄筋三階建の役場が自慢のたね。「髪を切りて草の裳を着たり」と書かれた昔の住民には想像もつかぬことがもう一つある。鹿児島市から西之表町までは船で六時間かかるが、昭和三十三年から中種子町松原山に種子島空港ができて定期航空路が開け、鹿児島市まで三十分で行ける。

パルプ材を船に積む

[illegible]の裏通り。[illegible]の年間消費量は1人当り約[illegible]リットル

西之表は古い集落である。平安初期には「鹿皮数百頭を貢調し更に別物なし」といわれた島も、西之表に本拠をおく種子島氏の治政下で次第に開拓され、甘藷伝来の影響もあって文化八年(一八一一)頃には武士、僧侶、塩つくり、農民、漁夫、商人、それに流人も加えて人口約一万四千を数えた。いまは全島殆んど余すところなく耕地となり、甘藷、黒糖、飛魚、鰹、米などの産物が多い。甘藷を原料とする焼酎は、昔から西之表の資産家の手によって家内工業的に醸造されていた。

昔ながらの土蔵造りの焼酎工場

西之表の[illegible]通り。[illegible]

生牛乳を町の工場へ

一にも甘藷、二にも甘藷、琉球から贈られた甘藷を初めて栽培した種子島久基（ひさもと）は甘藷の神様として祭られている。里芋を甘藷に切りかえ、島民の食生活を確保したのも彼である。島の甘藷は年産約千八百万貫。屋久島の四百万貫に比べると、たいへんな違いである。海上わずか二十粁をへだてた両島の生産量がこんなに違っているのは、全くその地形のしからしめるところだといってよかろう。種子島では甘藷の約六十%を澱粉製造用にまわし、毎年七十五万貫余を生産している。

[illegible]澱粉工場

沈澱した澱粉を掘り上げる

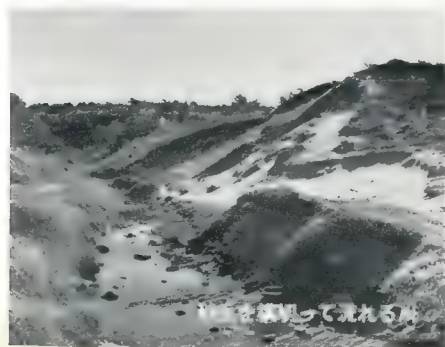
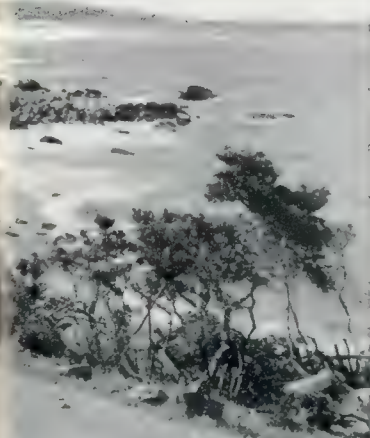
澱粉の沈澱槽

島には澱粉工場が数十カ所もあるが、やや見るべき設備を持っているのは深川部落の工場である。澱粉製造は島民の現金収入に重要な役割を演じている。形は変っても人々の生活を支えているのはいまもなお甘藷である。傾斜をつけた大きな沈澱槽に、すりつぶした甘藷を流しこんでから七―八時間もすると底に澱粉が沈澱する。芋をすりつぶすのは機械だが、澱粉の処理はすべて人手による。沈澱槽から澱粉塊を掘り上げるのも乾燥し易いように小割りにするのも、みな人の手だ。

すりつぶした芋を沈澱槽に流しこむ

澱粉粕は家畜の飼料になる

澱粉塊は小さく割って乾燥する

[illegible]から牛乳の出荷

甘藷の神様、種子島久基は島の海岸で製塩もはじめたが、塩を焼くためには多量の薪が必要なので植林を奨励し、建築材には、毎年の台風を避け得るような谷間に杉を植えさせたといわれる。種子島の海岸には段丘が発達しているが、西海岸には砂丘のつらなっている部分もある。久基は島の防風防砂にも心を砕き、全島に松を植えさせたが期待したほどの効果はあがらず、いまもってこの砂防工事には手を焼いている。猛烈な台風の襲来がたいていの砂防工事を徹底的に荒廃させてしまうのである。砂防工事のない道は、台風ごとに砂をかぶり、交通を絶たれるのが常だ。

種子島の中部以南には狭小な沖積平野もあり、古くから稲を作っていた。中種子町だけで一万数千石の米を産出している。この町の中心は野間だ。

天井にしまって[illegible]

[illegible]の中間形だ

雑貨荒物屋には豊富に品物が並んでいる。屋久島に比べれば、住居にも生活にもあるていどのゆとりがある。婦人は、まだ着物が主だが裸足の人は殆んど見あたらない。天井に一年分の籾を貯えている家も少なくない。乳牛が多いように考えられているが、実際には、馬の数の方が上位である。

中種子町は人口約一万九千。農家人口が九割の純農村だ。一戸当りの耕地面積は一町二反、鹿児島県では大農地区である。ここには愛唱すべき田歌も残っている。「日ぐれの千鳥が笠のふちよまわるよ　なに歌うてまわるかと　村問うてまわるよ」。もちろん、農家の生活は稲つくりだけでは成立たない。やはり年産三億円という甘藷がトップである。黒糖の約一億円、なかに落花生、葉煙草、麦、木炭、素材、畜産など多様な副業生産がみられる。一戸当りの年間生産額は約三十万円。

野間の牛乳集荷所

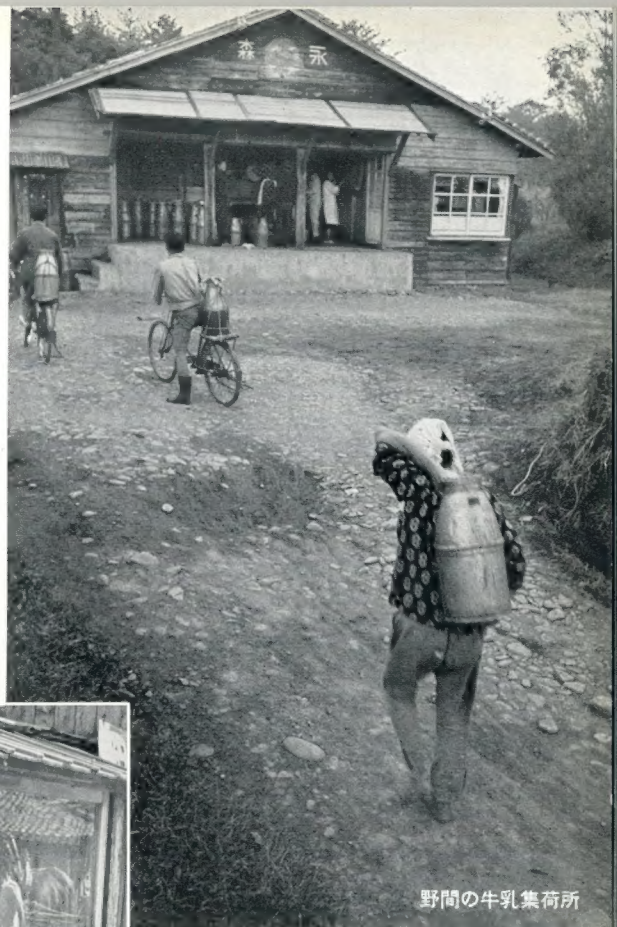
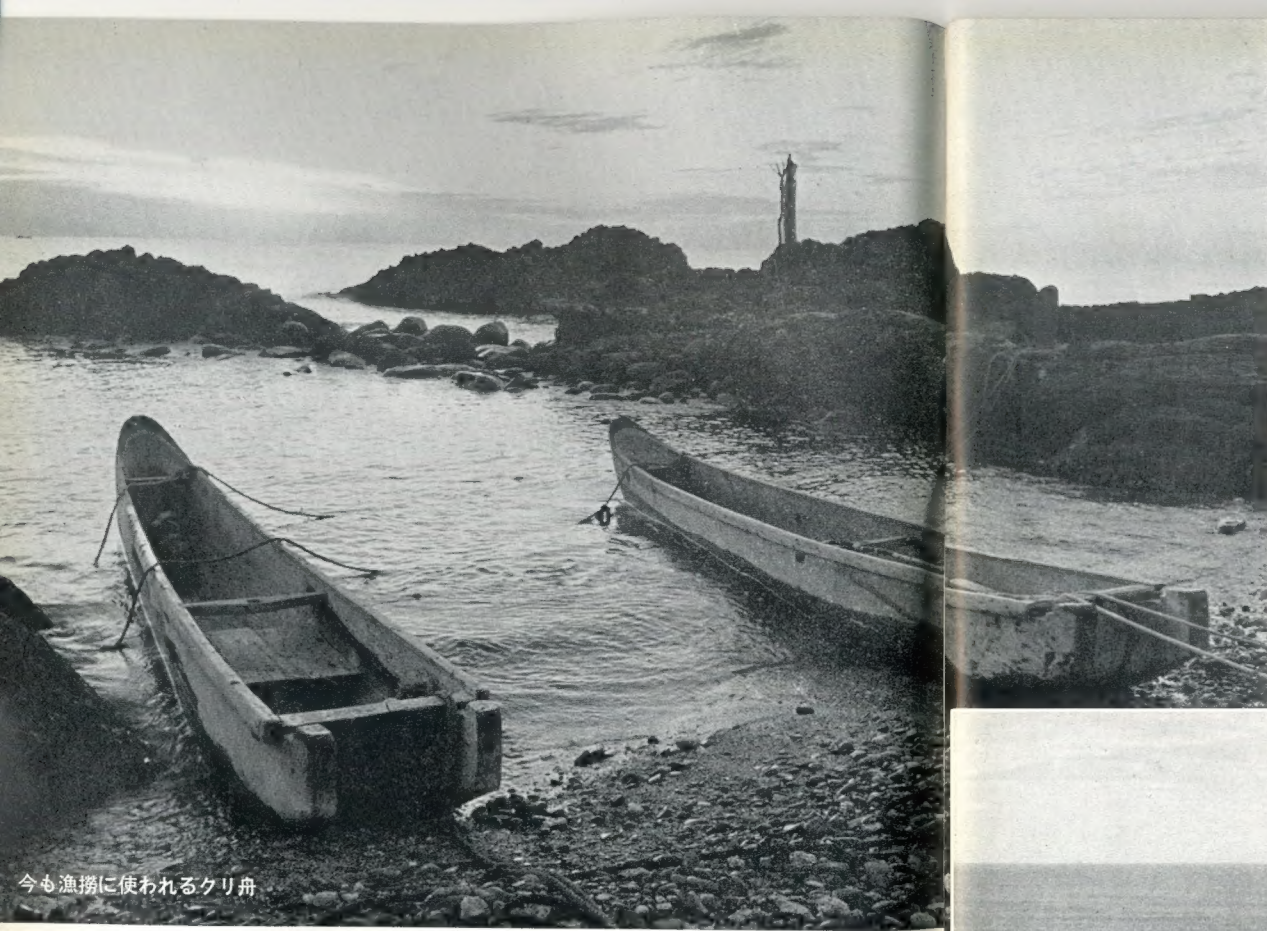
魚屋．肉が入れば肉も売る

店の品物は殆んど移入品

お茶菓子代りの黒糖

甘藷栽培が島の最大の産業

本土の鹿児島県が役肉牛の産地なので、牛肉はそこから移入されている。肉が入ってくると、素朴な魚屋の店先に「本日牛肉あり」と書いた貼紙が出されたりする。内地の農家でも明治時代には来客を応接間代りの縁側に迎え、お茶菓子の黒糖を箸ではさんですすめたものだが、この地方にはいまでもその風習がそっくり残っている。中種子町は県経済自立化運動の熊毛郡モデル町に指定されたが、製糸試験場、薬草試験場、飛行場があるところからもこの町の意欲がうかがわれる。

焼酎は昔ながらにカメで醸造する

今も漁撈に使われるクリ舟

西之表町の種子島家墓地

茶の湯に使った井戸

島の南端，門倉崎の鉄砲伝来の碑

平安時代には種子島は大隅国に併合されたが、末期には平家の荘園、島津庄の一部に加えられた。鎌倉時代には島津庄の地頭、島津忠久がこの島を治めた。慶長四年（一五九九）、南海の島は島津藩に直轄されたが種子島一島は、平信基を祖として鎌倉時代から連綿と続いた種子島氏の所領となった。ポルトガルの商船が鉄砲を伝えたのは天文十二年（一五四三）、種子島時尭の時であった。時尭は二千両を投じて二挺の銃を譲り受け、島の砂鉄で銃器を製作させたが、成功したのは翌年である。これがやがて織豊時代の戦史をかざる立役者となった。その技術は島特産の種子鋏にも生かされた。鉄砲伝来の碑は島の南端、御崎神社の境内に建っている。元禄十一年（一六九八）、甘藷を初栽培した久基は第十九代目の領主であった。甘藷は飢饉時の救荒食として全国に広まったが、その大きな功績は太平洋戦争中の食生活を回顧するだけでも明らかだ。種子島家は明治維新まで二十五代つづいた。屋久、種子、馬毛の三島は共に現在、鹿児島県熊毛郡に属している。

岩波写真文庫目録

1* 木綿
2 昆虫
3* 南氷洋の捕鯨
4* 魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10* 紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19* 川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22* 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 鉱山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 仏像
43* 化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47* 東京—大都会の顔—
48* 馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54* 水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57* 石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61* 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65* ソヴェト連邦
66 能
67* 造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90* 電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94* 自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97* システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105* 宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 写楽
111 熊
112* 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126* 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132* 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136* 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本 -1955年10月8日-
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道(南部)
208 小豆島
209 日本 -1956年8月15日-
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道(東・北部)
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道(中央部)
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本 -1957年4月7日-
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷—潮来—
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県
256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県
259 福島県
260 旭川・大雪山
261 大阪府
262 奈良県
263 北アルプスの山々
264 地形の話
265 静岡県
266 軽井沢
267 佐賀県
268 日本の社寺建築
269 宮崎県
270 十和田湖
271 福岡県
272 日本 —1958年正月—
273 宮城県
274 鳥取県
275 タイ -学術調査の旅-
276 インドシナの旅

新刊

栃木県 277
屋久島・種子島 278
岩手県 279

*印は品切でございます

種子島から西，はるかに硫黄島をみる

夕方，浜辺には馬を洗う人が集ってくる．中種子の海岸で

¥ 100